

部博士が北海道のコンブをそれぞれの地方ごとに細かく分類したのは、自ら道内の沿岸各地を何度も旅してコンブを実地に観察採集し、また多くの協力者により標本を集めて、各地方のコンブのわずかな特徴の違いにまで精通していたためですが、そのような植物学上の分類が昆布製品の銘柄区分や味、品質と言った食品としての微妙な違いにも見事にマッチし、現在でも水産業や利用加工業から合理性が認められていることは注目すべきことでしょう。

それはともかく、岡村博士のアカデミックな海藻分類学の継承者である山田先生が、このような宮部博士のコンブ分類法にも深い関心を持っておられたということはちょっと不思議な感じもしますが、しかし私にはなるほどと納得できる点があります。北海道の沿岸は砂浜地帯以外はどこでも豊富にコンブが生育して、観察や採集には事欠きません。山田先生は北海道に住まわれてからコンブに目をむけ、地方に採集にでかけるとその土地のコンブを観察し、また漁業者から生育状況や昆布漁業の実情を聞き取られたようで、私がコンブ研究を始めた当時は先生からよくご自身の経験談を聞かされたものです。なかでも、日本海のホソメコンブともリシリコンブとも判断しかねる標本をお目にかけてると大変興味を示され、「あそこのコンブは再生するものがあると聞いているので是非それを探さない」と具体的な地名をあげて教示されました。ま

た、後年知床の海藻採集に同行したとき「この地方のオニコンブは道南のマコンブと同じと思っていたが、実際に現地でたくさんのコンブを見るとやっぱり違うね」と納得されたように話されたことがあります。山田先生も宮部博士と同じように北海道各地のコンブを数多く観察されているうちにその分類法に次第に興味を持ち、納得されるようになったのではないかと思います。

宮部金吾博士が“The greatest algologist”という最高の賛辞をもって山田幸男先生を呼ばれた日からわずか半年後の1951年3月16日、博士は満91才の生涯を閉じました。この時の山田先生のご心境は如何ばかりであったでしょうか。山田先生が宮部博士の藻類、特にコンブ研究について述べられた追悼の辞の最後の一文を掲げて先生が慈父とも慕う亡き師に捧げる真心を偲び、ご生誕百年を記念する拙文と致します。

「宮部先生は自ら主として我国コンブ類の研究を行われ、(中略)特に我国海藻学の黎明期に当ってその基礎をきずかれた岡村金太郎先生の先達となり、またその後もたえず我国海藻学の発達に尽力されたことはその後を歩む吾々としては誠に感謝に堪えないところである。先生なき今一入その感を深くすると共に、この御高恩に報ゆるため一層の努力を致すべきを深く自ら心に期する次第である。」(「宮部金吾」1953)。

(041-0841 函館市日吉町 4-29-15)

吉田 忠生：山田幸男先生と海藻研究

1921年(大正10年)に東京大学に入学された山田幸男先生は植物分類学を志し、海藻学者を養成したいという早田文蔵先生のご意向に従って、海藻学を専攻することになったという。勉強は江ノ島や上総大原などへ定期的に採集にいて標本を観察し、当時水産講習所におられた岡村金太郎先生の指導を受けることによって始められた。ちょうどこの頃、北海道大学の教授であった故速藤吉三郎氏の蔵書と多量の標本が東京大学に寄贈され、これらを利用することで大いに勉強が捗ったことであろう。1924年には早田先生の指示によって台湾に旅行して、各地で熱帯性の海藻を集め、

さらに1925年にはマイクロネシアに赴いて海藻採集をされた。これらの結果に基づいて、The phyto-geographical relation between the Chlorophyceae of the Mariannes, Carolines and Marshall Islands and those of the Malay Archipelago, Australia and Japan という表題で、東京で開催された第3回汎太平洋学術会議で発表された。このころ先生は近衛兵として兵役に就いておられたため、軍服姿で講演されたとのことであり、衆目を集めたことであろう。会議の間には Berkeley の Setchell 教授とも会う機会があり、それが縁となって1928年(昭和3年)から2年間の在外研究の場所として Setchell 教

授の研究室を選ばれたのであろう。これは1930年4月に設置予定の北海道大学理学部の教授候補者として出張を命じられたものである。

California 大学留学期間中は主として紅藻のソゾ属 *Laurencia* について研究された。体の構造を調べて、表皮細胞が柵状に配列するという特徴や、髄部の細胞壁にレンズ状の肥厚があることなどが分類形質として有用であることを確認された。その後、バリの自然史博物館、ベルリン植物園、コペンハーゲン大学、ルント大学植物園、ウプサラ大学植物園など、ヨーロッパのいくつかの標本室でソゾ属の重要標本を調べて、Notes on *Laurencia*, with special reference to the Japanese species (1931) を纏めて学位論文とされた。ヨーロッパ滞在中は標本室でご自身で採集された多量の海藻標本を日本から持参して、タイプや重要標本と比較することによって多くの知見を得られるとともに、各国の著名な海藻学者との交流を深め、文献の収集にも努力された。

帰国後はただちに新設された北海道大学理学部に赴任され、1964年(昭和39年)に定年退官されるまで、植物分類学教室で研究と学生の指導にあたられた。北海道大学では農学部水産学科において宮部先生門下の時田 郁氏や永井政次氏が樺太・千島の海藻を研究しておられたこともあって、北海道から南の海域を主な対象とするようになっていった。とくに熱帯の海藻についての研究によって、キリンサイ属 *Eucheuma* (1936)、コナハダ属 *Liagora* (1938) の monograph を書かれた。ホンダワラ属 *Sargassum* の南日本産の種類についても研究をすすめられた。Yendo (1907) の "Fucaceae of Japan" によって本州や北海道沿岸に産する種類については大部分の解明がなされていたので、先生は南方系の種類に注意を向けられ、九州南部や沖縄のホンダワラ属を対象とされ、なかでも多くの種を含むホンダワラ亜属の解明に努められた。しかしアジアの熱帯に広く分布するこの群の研究は現在に至ってもまだ不十分な状態にある。

1935年(昭和10年)に岡村金太郎先生が大著「日本海藻誌」の完成を待たずに逝去された。この著書の編集を引き継がれた先生の努力で1936年に無事発行され、とくに紅藻類については先生の意見も加えられており、その後の海藻研究の不可欠な参考書となった。これを契機として岡村先生のご遺志をついで日本の海藻相を明らかにすることに改めて意欲をもやされ、後継者の育成にも努められた。また、岡村先生が集めら

れた標本を遺贈された。この中には「日本藻類図譜7巻」(1907-1942)の元になった標本をすべて含んでいる。これらは現在でも北海道大学に保存されて、利用されている。

各地の海藻相を明らかにすることでも努力され、台湾(1925)、琉球嶼(1950)、与那国島(1938)、沖縄那覇(1934)、菅島(1950)、陸奥湾(1928)、厚岸(1944)、北千島得撫島(1935)などの種類相を発表された。

いろいろな分類群についての知見は Notes on some Japanese algae I-X (1930-1944) として逐次発表された。ヨーロッパの標本室での研究で明らかにされた事柄も多い。このなかで昭和天皇が葉山沖でヒドロゾア研究のために行った採集の副産物として集められた海藻の標本を研究して、新種とされたものがエツキノツカサモドキ *Callophyllis hayamensis* など10数種ある。

先生はまた海藻の分類学に標本の形態的な形質だけではなく、生活史の知見を加えることの重要性を認識され、1933年(昭和8年)室蘭に設置された海藻研究所(のちの理学部付属海藻研究施設)において室内培養による生活史の研究を推進された。コンブ類の配偶体(神田千代一氏による)やイギス類(中村義輝氏による)につづいて、1950年代から発展した単藻培養の技術と培養液の改良によってヒトエグサ類やカヤモノリ(生活史の解明(館脇正和氏)など重要な研究が行われた。

北海道文化財保護委員として、特別天然記念物の阿寒湖のマリモについても注意をはらわれ、1960年以後、阪井與志雄氏や榎本幸人氏らの協力を得て調査研究に努力された。阿寒湖内のマリモの分布について纏められた報告書「特別天然記念物阿寒湖のマリモ分布状況調査概要」(1963)は、マリモ球状集団が湖内の北側にあるチュウルイ・キネタンベ湾の一部に局在していることを明らかにしたもので、その後の現存量調査の基礎になった。

水産植物学にも注意を向けられた。卒業生のうちで水産関係の仕事についての方も多数ある。北海道の主要な産物であるコンブ類の種類を調べるとともに、代表的な種類の図を画工に描かせていた。これらの図は後に川嶋昭二氏によって纏められ「日本産コンブ類図鑑」(1989)として刊行された。

長年にわたる山田先生のご努力によって北海道大学理学部が藻類研究のセンターとして世界的にも認められるようになった。

(北海道大学名誉教授)